

モンリオール滞在記

国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構・量子医学研究所 研究員

森 数馬



もり・かずま 博士（学術）。大阪大学大学院情報科学研究科特任助教、情報通信研究機構 CiNet 研究員、マギル大学モンリオール神経学研究所訪問研究員等を経て2023年より現職。専門は感情神経科学。単著論文に Decoding peak emotional responses to music from computational acoustic and lyrical features. *Cognition*, 222, 105010, 2022.

2021年7月から2023年7月まで、科研費の国際共同研究加速基金（A）の援助を受けて、カナダのマギル大学へ留学して研究を行う機会に恵まれました。所属先はモンリオール神経学研究所という、心理学の教科書で誰もが目にしたことのあるペンフィールドが設立した脳科学の研究所でした。

受け入れ先は、聴覚・音楽の認知神経科学の分野における世界的な権威であるロバート・ザトレ教授の研究室でした。論文はよく読んでいても面識はなかったため、日本から予算を持っていく上で受け入れをお願いするメールを送ったのが始まりです。すると、世界中から受け入れ依頼が来るので選抜のため研究プロポーザルを送ってほしいという旨の返信が来ました。A4で1枚程度の研究計画を送って無事にOKを出してもらうことができ、その後、科研費申請を行いました。予算の獲得後にコロナで渡航期間が先延ばしにもなり、今思い返すと渡航までの道のりは長いものでした。

渡航時は1回目のコロナワクチンが普及し始めた頃であり、当時のカナダは厳しい水際対策を行っていました。隔離などの渡航ルールに違反があった場合は懲役か多額の罰金を科していたため、恐る恐る渡航して海外生活をスタートさせたことをよく覚えています。モンリオールのあるケベック州はフランス語が公用

語であり、街で目にする看板にもフランス語が記されています。しかし、さまざまな国から人々が集まっていた多くの方は英語も話していました。とりわけ、街の西側はアジア圏の人が多く住んでおり、日本の食材もスーパーで入手することができました。モンリオールの日本人人口は全体の0.2%に過ぎないものの、日本食レストランや日本製の車の販売所が街のさまざまな場所に存在しており、日本文化の浸透が感じられました。生活の始まった夏は、30℃を超える日が少なく快適でしたが、冬はマイナス20℃を下回る日も多く、また5月に雪が降ることもあり、寒い季節が非常に長かったことが印象的でした。

研究室では、渡航1年目はゼミがZoomで行われておりイベントもあまりない状態でしたが、2年目に入ると多くのことが対面となりました。教授が著名であることから、アメリカ・ヨーロッパ・アジアなどのさまざまな国から大学院生が集まっているとともに、他国の研究者が訪問しに来ることも数多くありました。教授自身も出張でよく他国に出かけていました。そんな中で行った研究活動でしたが、自分の考えで研究を進めて、教授とたまにミーティングをするというやり方で作業に臨みました。長い研究経路を経てからの渡航でなければ、このような作業の仕方

かもしれません。論文作成時にはそうしたミーティングの一回一回が査読のようになり、品質を高めながら執筆を進めることができたと感じています。加えて、教授のネットワークによって複数国の研究者ともミーティングして意見をもらうことができました。そのため、査読を何回も受けた状態から投稿を開始することができたと感じています。専門家の国際的なネットワークの重要性を、身を持って知ることができました。

また、大学院生に指導を行うこともありましたが、英会話で正確にコミュニケーションをとることは難しく、歯がゆく感じることも多々ありました。しかし、脳データの解析プログラムの挙動を目の前で見せることや、図を作り込んだスライドを説明することで言語の壁を補って進めていくことができました。普段からプレゼンや説明をわかりやすくすることを心掛けることで、留学時のやりとりにも役立つのではないかと思います。

聴覚・音楽の認知神経科学の分野は国際的に見ても大きな分野とは言えず、日本の中のみで研究を進めることに難しさを感じることもあります。しかし、今回の留学を通して複数国の専門家とつながりを持つことで、国際的な流れの中で研究を進めていける自信が持てました。マイナーな分野の研究を専門とする方こそ、留学して海外の専門家と交流を持つことをお勧めします。